

(公開学習Ⅰ) 第5学年1組 社会科学学習指導案

授業者 谷田 健司

5年1組教室

1 単元名「わたしたちの生活と水産業」

～給食の水産物から見た東日本大震災とわたしたちの生活～

2 授業構成

(1) 教師と教材

本単元は、小学校学習指導要領において

内容(1)

我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深い関係をもつて営まれていることを考えるようにする。

ア 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること
ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働き

と位置づけられている。

本時は、わたしたちの生活と水産業の関わりについて学ぶ。水産物は、調味料や薬品など加工品を含めると多岐にわたり、県内ものだけではなく、県外ものや外国ものもわたしたちの食生活を支えている。しかし、現在水産業には、水産資源の減少や漁業者の高年齢化と消費者の食の変化から魚離れという問題点がある。この度の東日本大震災で、大きな被害をうけた三陸海岸の魚介類とわたしたちの生活とのつながりを通して、県外との深いつながりやわたしたち消費者と生産者とのつながりを考えさせたいと思い、本単元を構成した。

(2) 子どもと教師

児童は、本時までにかつお漁のさかんな焼津港を中心として漁の様子や港の立地条件・工夫、漁業者の抱える問題点、とる漁業から育てる漁業へ変化していること等を学習してきた。学習する中で、次のようなことに気づいてきた。

- ・焼津港は、関東・中京など大都市と近いという立地条件の良さがあり、港と水産加工団地を深いつながりがある。
- ・日本の水産業の実態から、わたしたちの食生活の変化と漁業者が抱えるさまざまな問題。
- ・とる漁業と育てる漁業の違いや携わる人々の工夫や努力。
- ・生産者が、新鮮な魚介類を消費者に届けるためにしている工夫や努力。

本時は、自分たちの食べている学校給食の食材にある魚介類を通して、わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づかせたい。また、東日本大震災が与えたわたしたちの生活への影響について、消費者の立場だけでなく生産者側の立場からもとらえていきたい。

(3) 子どもと教材

本時では、子どもたちが普段よく目にする給食の献立表を見直すことで、わたしたちの生活に県外の食材と深く繋がりがあることに気づかせたい。献立表の水産物を注意深く見ていく中で、今までの学習を想起し、わかめや昆布の養殖業と大震災との繋がりに気づかせたい。養殖業の実態を取り上げた新聞記事から生産者への影響について考えさせたい。遠くの県での出来事が、わたしたちの生活に繋がる身近な問題としてとらえさせたい。

3 単元目標

水産業に従事している人々の工夫や努力について調べ、水産業が国民の食糧確保という重要な役割を果たしていること、自然環境と深い関わりを持っていることを考えることができるようにする。

4 学習計画（全 9時間）

- 新聞の記事や資料をもとにして、漁獲量の多い境港や焼津港にどのような魚が水揚げされているか調べ、それらの魚と海流の関係について考える。(1)
- かつおがどのようにしてとれるのか、一本釣りと巻網漁の違いについて絵や写真をもとにして、かつお漁の工夫とそれぞれの漁のよさを考える。(1)
- 写真や地図帳から焼津港の立地条件や港全体の工夫について調べ、漁師の視点に立ち焼津港にかつおが多く水揚げされる利点を考える。(1)
- 昔と今の生産量や働く人や輸入の変化のグラフから水産業の問題点に気づき、どうしてそのような問題が起きたのか原因とこれからの水産業について考える。(1)
- 現在、取り組まれている養殖業や栽培漁業について、教科書や資料やインターネットを活用して調べ、今までのとる漁業と育てる漁業の違いや携わる人々の工夫や努力について考える。(2)
- 新鮮な魚介類が生産者から消費者に届けるためにたくさんの携わっている人や仕組みがあることを知り、それぞれの携わっている人たちの工夫や努力について調べる。(1)
- わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づき、震災がわたしたちの生活へ与えた影響について考えることができる。(1) (本時)
- 豊かな海をつくるために、生産者と消費者が協力して取り組む活動について調べ、自分自身がこれからの水産業について、どのようなことができるか考えまとめる。(1)

5 本時の学習について

(1) 本時目標

わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づき、震災がわたしたちの生活へ与えた影響について考えることができる。

(2) 期待される児童の様相

- A わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づき、震災が水産業に与えた影響を多面的な立場で考えることができる。
- B わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づき、震災が水産業に与えた影響に考えることができる。
- C わたしたちの食生活は、県外の水産物と深い関わりがあることに気づくことができる。

(3) 準備するもの

- 学校給食の仕入れ業者 震災による水産物への影響 4月4日付 通知文
- 2010年8・9月献立表
- 児童の意識調査（4月・6月 実施）
- 給食の写真3枚（通常の給食、魚抜いた給食、魚とわかめ抜けた給食）
- 朝日新聞 2011年6月7日「養殖やめたい」岩手の漁協困窮 「国の支援遅い」

<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201106060488.html>

(3) 本時の展開(○教師の意図 ◇支援)

学 習 活 動(・児童の反応)	教師の支援・意図
1. 東日本大震災とわたしたちの生活への影響についての意識調査の結果を見比べながら、気がついたことを発表し合う。	○意識調査の結果から、鳥取県に住むわたしたちの生活への影響がないという意見が多かったことや「身の回りの物が少なくなった。」「物が入らなくなった。」という意見に注目させ、このたびの震災が水産業と私たちの生活にどのような影響があるのか考えさせたい。
東日本大震災は、鳥取県に住むわたしたちの生活や水産業にどのような影響を与えたのだろうか。学校給食を通して考えてみよう。	
2. 学校給食をもとにして、話し合う。 (1) 給食食材の卸業者からの大震災による報告書を読み、文章に出てくる語句や地名を地図帳や資料集で確認する。 (2) 報告書から、学校給食に影響を与えた食材を見つけ、献立表に色を塗っていく。 (3) 資料集や地図帳をもとにして、海藻類と三陸海岸の関係について調べる。 (4) 三陸海岸のわかめ・昆布の養殖漁業者の問題を知り、どのようなことを困っているのか考える。 3. 献立表や養殖業者の影響から、本時の課題について気づいたことやわかったことについてを発表する。 4. 資料や班での話し合いを参考にして、わたしたちの生活にどのような影響があるのか、自分の考えを新聞にまとめる。	◇課題をとらえやすくするために、魚の食材が多い日の学校給食を掲示する。 ○宮城・岩手県の水産業が盛んで良い漁場であることを地図帳に印をつけたり、世界三大漁場であることを説明したりすることでとらえさせる。 ◇作業の遅い児童に対しては、塗り終わった児童の献立表をスクリーンに映しおくことで参考にしてよいこととする。塗り終わった児童は、本時の課題と確認し、気がついたことをノートに書くように声掛けを行う。 ○資料を確認することで、今までの学習と関連付け三陸海岸は、わかめや昆布の養殖業が多く、両県が全国の70%の生産量のある国内有数の漁業拠点だということをとらえさせたい。 ◇食材の変化をとらえやすくするために、通常の給食と魚の抜けた給食、魚・海藻類が抜けた給食の3枚の写真を並べて掲示する。 ◇養殖業者の実態を捉えさせやすくするために、新聞記事の養殖業者からの声に注目した児童を賞賛したり、生産者の立場に立っての意見に注目させるようにする。 ○献立表や給食の写真からだけではなく、普段の自分たちの生活を振り返り、消費者の視点だけでなく、生産者の視点でも考えさせる。 ◇本時のまとめがしやすいように、児童の発言を消費者の視点と生産者の視点のどちらの立場から見た意見か意識して聞き取り、黒板にまとめるようにする。 ○大震災が自分たちの生活にどのような影響を与えたのか自分の食生活を通して自分の考えをしっかりとまとめさせたい。